

編集後記

本号は特集として大腸の早期癌をとりあげ胃早期癌と対比した。

近年食生活の西欧化に伴って大腸癌が増え、実地臨床の場において胃癌につき卑近なものになった。大腸癌——その早期発見も胃と同様消化管に発生する癌である以上胃癌におけると同様な手法でアプローチが試みられることは当然で、その証拠にX線と生検を併用した内視鏡検査による精密検査が大腸癌診断の決め手であり、来院患者における早期癌発見には理論的にはもはや問題はなさそうである。しかし、これらの検査も胃の場合にくらべ、前処置から検査そのものについても数等の手間と熟練を要し、患者の肉体的負担も決して軽くないことも知られている。

有症状患者は大部分進行癌で、予後の良い早期癌発見のためには、有症状患者やハイリスクグループに対する精検と同時に、無症状者に対する集団検診が必須であることは自明の理である。

上部消化管と相違した解剖学的、病態生理学的特徴を有する下部消化管に対する集検用のスクリーニングフィルターとしては、X線や内視鏡検査は現在の装置と手法では現実的でなく、本当の意味でのマスをあつかう集検の第一次スクリーニングには好むと好まざるとにかかわらず sensitivity が高く、簡便、経済的でしかも肉体的負担の少ない方法、例えば便潜血反応などが注目されることになる。便潜血反応は胃集検の初期に試みられたが、棄て去られた歴史があり、大腸集検にとりあげるとすれば更に新しい工夫が要請される。これに関し、欧米においては既に数々の優れた臨床研究が報告されており、近年わが国においても追試がなされている。現在のところ大腸早期癌の発見を飛躍的に向上させるためには、X線と内視鏡による精検と共に、大腸集検の開発と大腸ポリペクトミーの普及がポイントになりそうである。

<春日井達造>

<編集> 早期胃癌研究会